阿伽井及阿伽井屋について

建造物研究室

一　はじめに

第22次平城宮跡発掘調査で覆屋のある井戸が発掘され、各方面に報道された。それと類似のものに園城寺（滋賀県大津市）金堂西側の阿伽井及びその覆屋があり、奈良では東大寺のものが、お水取り行事と共に頗る著名である。

仏教辞典によると「阿伽」とは「神聖な水」という意味の仏教語であることが判る。

平城宮で検出のものを直ちに阿伽井及び阿伽井屋に結びつけて考えるのは適当でないと思われるが、此処では古い寺院にある井戸と覆屋とについて少しく紹介してみよう。

二　阿伽井について

東大寺のお水取りは厳寒若狭井から水を汲むことが行事の中心をなしている。現在この井水は神聖視のあまり阿伽井屋の内部構造は部外者には一切秘密にされているが、その構造については、東大寺要録諸院章第四、二月堂の項に(註1)

（前略）今聞古人云、実忠和尚、被レ始二六時行法一時、二月修中初夜之終讀二神名帳一勧二請諸神一、由茲諸神、皆悉影嚮、或競テ與二福祐一、或ハ諍テ為二守護一、而二遠敷明神ハ恒慈二猟漁一精進是希ナリ、臨二行法之末一、晩ク以参会、聞二其行法一随喜感慶ノ堂辺可レ奉レ献二閼伽水一之由所二示告一也、時ニ有テ黒白二ノ鵜一忽ニ穿二磐石ヲ一従二地中一出飛居二傍樹一従二其ノ二迹一甘泉湧出香水充満、則畳テ作石ヲ為二閼伽井一、其水澄映ニシテ世旱ニモ無レ涸、彼大明神ハ在二若狭国遠敷郡一ニ、国人崇敬具二大威勢一前ニ有二大川一川水砰磯トシテ奔波涌流ス、由レ献二其水一河末渇盡ノ俄無二流水一、是故俗人号二無音河一云々、然則二月十二日夜、至二後夜ノ時一練行衆等下二一集井ノ辺一、向二彼明神ノ在所一ニ、加二一持井水一、以二加持力一、故其水盈満、干レ時汲取テ入二香水瓶一不レ令二断絶一自余相承遂為二故事一、従二天平勝宝之比一、至二于今時一及二四百歳一雖レ経二数百年一其瓶内ノ香水浄澄潔ニシテ、飲者除レ患身心無レ悩、執猶如二無熱池八功徳水一矣。

と書かれていて、その井泉が2ヶ所から湧出している由来と作石で畳んだ井戸側の構造とを明示している。

以上は東大寺要録諸院章第四、一、二月堂の項の抜萃であるが、この記録には阿伽井屋のことにはふれていない。

奈良に於ける阿伽井屋でもう一つ著名なのは秋篠寺の大元帥明王出現の井戸である。頼瑜の秘抄問答第十三によると、昔常暁師が秋篠寺の閼伽井に臨んだとき、水底に忿怒の形影が現じたのを見、奇特の思いをなしてその形を図絵したが、渡海入唐のとき、その姿と同じの本尊を拝することができたという乗印阿闍梨の物語を載せている。

秋篠寺の阿伽井の由来も平安時代初期否それ以前に溯ることが知られるのである。現在の井戸は、一辺1m80角であるが、下方は木枠、その上に自然石を積みしつくいでつめ、その上が切石の枠、更にその上をコンクリートで塗り固めている。深さは約1m、底には3cmぐらいの砂利が一面に敷きつめられているのが澄みきつた水を通して見える。その東背後にも別に小さな井戸があるが、これは庶民に水を汲ますための後世の設備である。

寛永9年の古図によると、旧境内の西北方2町半に飛地（160坪ほど）があり、それを「閼伽井森」としている。現本堂の背後には弁天池や園池の跡が二、三ある。一方南門外の八所御霊神社には霊水が湧き、金堂跡南前面にも井戸がある。

これらを結ぶ二、三の水脈が交つたところが大元明王出現の阿伽井の位置なのであろう。

このような清泉の仏教的信仰は大和国ばかりではない。山城国にも数々ある。中でも平安時代初期の開創とされている醍醐寺にそれがある。醍醐寺新要録上伽藍部准胝堂篇、一草創事に

慶延記云、堂建立之由来、尊師者貞観寺僧正（真雅）入室弟子也（中略）爰以三朝之顕現、深思一門之建立、遙守巽槇方、自西坂、次第攀登、令執金剛神奉出之時、奉立之石辺、暫安息閼伽井之許、有白髪老翁、掻除木葉、以左右手、救水飲云、阿波礼醍醐味哉、忽然失矣、爰知化人之飲水、尊師至水許、御覧之、水自地面、高湧出為後見之、注置此石於水廻、又覧准胝堂跡、為不可思議之勝地（下略）

とある。この名水の味いを形容した仏教語の「醍醐味」からこの寺の名を得たものであり、上醍醐の井泉の存在が、この寺の根本を形成したものであつたことを意味しよう。

仏寺の草創と阿伽井との関係は古くは近江国園城寺にもある。

「寺門伝記補録第六　御井来由付寺号」によると、

長等山東埀一区在焉、天智聖代、太政大臣皇子大友之宅地也、界濶地坦、形勢奇絶之処也、其間有レ水、名ハ御井（ミ）一、水之為レ体也不レ洌（ハゲシカラ）不レ鈍（ニブカラ）、甘而且清、妙具二八徳一、冬夏無二増減一、実是無雙霊水也、貞観己卯年（元）智証大師始至二于当山一時、逢二大友都堵牟麻呂一、大師問レ之曰、当寺題日二園城一、更名二御井一者何也、大友応曰、伽藍西砌有レ井、天智天武持統三皇降誕之時　把二此井水一以浴二玉質一時俗因而名曰二御井一　蹔二此処一立二伽藍一俗復以レ水名レ寺、呼日二御井寺一耳、大師聞レ之深以感心、即復改レ御為レ三、而言是即取二三皇浴井之義一、亦是取下把二此井水一、以為二三部灌頂之閼伽一遠至二於慈尊三会之期一之由上焉耳、爾来即以二三井一為寺号也

第1図　園城寺阿伽井石組

とある。（第1図）

阿伽井の構造を略述すると、湧泉の周辺は自然形の石を組んで、あたかも平安時代東三条殿の千貫泉や高陽院の作泉のようにしており、その南西隅から今日でも音を立てて湧出している。ただ北外側から半分阿伽井屋へ入り込んだ石のあること、東正面から格子戸を通して覗くと3個の石が釣合よく立てられており、それに連注縄（しめなわ）がはられている。むかし北及南の水際には板石風のもので囲ってあり、これは立石とはうまく調和しそうにない。

以上の諸点から見て、昔からこのような覆屋であつたかどうか疑問視されるのである。このほか清泉の存在[註2]が著名社寺草創に直接間接影響を与えているものは全国に夥しく、神祇の名となり、祭祀や仏教行事の称となり、神職僧侶の姓名又は土地の名称となつているものが多く、日本人が如何に清泉を神聖視し、その宗教的利用に関心を寄せていたかが判ろう。

三　阿伽井屋

以上は清泉即ち阿伽井についてのべたのであるが、ここではその覆屋である阿伽井屋について説明する。

まず東大寺阿伽井屋はいつごろでき、その作者は誰なのか。東大寺上院中過帳（二月堂）によると

（前略）

後白河天皇　食堂盤休施入珍慶法印

湯屋阿伽井屋作寛秀大徳練

別当勝賢前権僧正

とある。後白河法皇は建久3年3月13日崩御、勝賢僧正は建久7年6月22日卒去であるから寛秀の死はその間であり、従つて藤末鎌初にかけて練行衆の一人であつた寛秀によつてはじめて阿伽井屋が建てられたものとすることができそうである。

その様式構造は、桁行3間（中央1間は8尺、他は6尺9寸5分）、梁間2間（柱間6尺5寸）単層切妻造、本瓦葺である。四周のうち南側の板扉の出入口を除き、あとは全部板壁[註3]となつている。（第2図）

秋篠寺の阿伽井屋については、その造営年代や作者を詳らかにしがたいが、秋篠寺真言院縁起一巻奥書保延五巳未歳正月八日（江戸時代書写本）によると

（前略）保延元年六月中　魔風頻扇兵火忽起而一山既成焦土稍得以奉出於講堂之尊像且防助講堂一宇故令達之於叡聞便課於工匠以不日成再建香水閣及修補本堂焉然七堂不全復於旧制也嗟惜矣乎（下略）

とある。この記録は全面的に信ずるわけには行かないが、仁明天皇の

第2図　東大寺阿伽井屋

御宇（832〜849）当時小栗栖常暁が太元明王の尊容を感得し、この阿伽井の名声を得る前後において、その香水上に覆屋をかけて、その汚損を防いだことが考えられる。

園城寺阿伽井に覆屋のできたのがいつの頃か不明であるが、泉辺の石組の方が先行することは前にものべた通りである。現存のものは慶長内裡の車寄を移して復興したとも、或は金堂の建立された慶長4年（1599）頃にここで新築されたものとも伝えられる。(註4)

桁行3間、梁間2間、柱間は中央1間は6尺5寸他はすべて5尺、単層、向唐破風桧皮葺である。角柱で、唐様の三斗を入れ、正面中央に蟇股を見せている。正面は格子戸で外側から覗き見ることができるほか、他は3方板壁である。背面を除き、欄間に花狭間を入れている。総て化粧屋根裏で北面の小壁には極彩色の雲紋楽器などの模様が美しい。

阿伽井屋とその周辺の立石群とを見くらべると、その石組は最初からここに湧泉の覆屋を想定してのものと考えられなくはないから、覆屋と共に周辺の石組はかなり変更があつたとせざるを得ないようである。おそらく上古三帝のゆかりの聖泉として、その保存の意味から覆屋の出来たのは、相当早いのであろうが、桃山或は江戸時代初期の覆屋とは形状に於ても、規模に於ても少し違つたものであつたとみたい。

四　おわりに

はじめに断つておいたように、第22次調査検出の井戸と覆屋とは色々の点で異るのであるが、湧出する地点が平城宮側の場合は水上池方面からの浅い渓谷地形に於ける地下水の一露頭であり、他が何れも丘陵麓の湧泉であること、井戸枠及び覆屋については清泉の保護のため木製又は作石による枠を以てし、入口を除いて他の3方は板壁で囲つている点などは頗る類似しているのである。

（森蘊・牛川喜幸）

註

（1）東大寺の阿伽井及び阿伽井屋の内部のことが知りたく、寺の関係者に聞き合わせたところ、水は井戸の底からも湧出するが東方よりも少量流入するものらしいこと、ただ昔から井戸の水底が浅く、ズック様の柄杓で汲むと少し砂がまじるということだけが判つた。

（2）「寺門伝記補録御井来由付寺号」の一節

補日名二御井一者、天子井池（中略）是故天子所居之処、必有二御井一若三南都一者累代宮城、仍即有二数箇処御井一也

とあり天智天皇の山御井、光仁天皇の靱負御井、長田王子の山辺御井などをあげ更に延喜式神祇部を引いて山城国愛宕郡三井神社、大和国宇陀郡御井神社、美濃国多芸郡御井神社、但馬国気多郡御井神社、出雲国嶋根郡御井神社、同出雲郡御井神社などがある。同神祇部臨時祭式には鎮水祭（みずしづめの）、御竈神祭、御井祭、御川水祭（みかわみず）などがある。大和国の社寺でも霊水にちなみあるものが多い。また清泉と貴族の住房、別業、それらの施入寺院に関しては学報第13冊森蘊「寝殿造系庭園の立地的考察」に数多くの実例を挙げているので参照されたい。

（3）写真で見る通り壁面の上方は菱格子になつているが裏から板が打ちつけてある。

（4）園城寺金堂擬宝珠に「慶長四年十二月吉辰」とある。また慶長内裡中元和45年頃建立の権大納言局宸殿が正保4年に円満院門跡に移建されている。ほとんど時を同じくして慶長内裡中の御車寄がここに移される可能性もなしとしない。